

# 開聞地域



国指定有形文化財

松梅時絵櫛筒付属品 站 目録共 一合

松梅時絵櫛筒

目録共

一合

目録共

一合

目録共

一合

美術工芸品で  
表に松

音を金粉で  
描いた時絵が

や梅、鶴、亀

などを金粉で

装飾された化

粧箱で、中に

は円形の手鏡

が大小2枚、

櫛が3点、そ

の他小道具など

の化粧道具が入っています。作者や伝来は明らかになつていません。  
昔は枚聞神社の本殿に納められており、「玉手宮」などと呼ばれて大切にされてきました。

化粧箱の目録には大永3(1523)年の年号が記されているた



国指定有形文化財 松梅時絵櫛筒付属品並目録共 一合

め、室町時代の高貴な女性  
の持ち物と推定されています。

県指定天然記念物



礁状玄武岩

繩状玄武岩

玄武岩とは、地表や地  
下の浅いところで急速に  
冷えて固まつた溶岩の一  
種です。

開聞岳のふもとの花瀬  
から田崎の海岸にかけて  
露出する玄武岩は、紀元  
前500年頃の開聞岳の大爆発のときに流れ出たた  
ものと推定されています。



住所：宿市開聞十町1366

玄武岩は、ガラスの主成分でもある二酸化ケイ素の含有量が比較的少なく、流動性に富んでいます。そのため、地表に流れ出た際に、障害物があるとうねうねと曲がつたり紺状にねじれたりしてユニークな自然地形を形成します。

日本で見られる溶岩は、桜島にあるようなゴツゴツとした碎塊溶岩がほとんどですが花瀬海岸は、沖へ向つてドロドロと流れ出た溶岩の様子を見る事ができるとても貴重なポイントです。紺状玄武岩は、火山と大地の活動を知ることができる珍しい溶岩です。

#### 県指定有形文化財

## 枚聞神社本殿

りふさじんじゃほんぐん

枚聞神社は薩摩国の一の宮ですが、創建がいつなのかはつきりしません。文書に現れる最初の記録は、貞観2（860）年の『日本三代実録』です。枚聞神社は、貞觀16（874）年の間聞岳の噴火により、一時、出宿神社に御神体を移したといわれています。現在の本殿は、慶長



住所：指宿市間聞十町4208-1-1

枚聞神社本殿 背後に御神体の枚聞神社が並んでいます。



15（1610）年に島津義弘が寄進したもので、その後、天明7（1787）年に島津重義が改築しています。

社殿の正面に勅使殿があり、その奥に拝殿・幣殿・本殿と並んでいます。

本殿は、千木、鰹木を銅板葺きの屋根にのせた「母屋造」となっています。総朱塗檜彩色で、特に雲電の彫刻の入った向柱（龍柱）は製作技術の高さを示しています。

これらの建物

には、「奉再興島津兵庫人道慶長十五庚戌年九月九日」の銘が入った擬宝珠が使用されています。建立や修理などの棟札も、現存しています。また、宝物殿には国指定文化財をはじめとして、貴重な文化財が多数展示されています。



瑞應院跡

市指定史跡

## 瑞應院跡

枚聞神社の西側一帯には、江戸時代まで瑞應院という寺がありました。瑞應院は枚聞神社の別当寺（神社に付属していた寺）で、普通僧正によつて白建3（652）年に建てられたとされます。

その後、数百年の間、廃寺となつていきましたが、正中3（1326）年に島津氏が舜請和尙に再興させ、



住所：宿市開間十町1366



住所：宿市開間十町1406-1



瑞應院跡地石棺出土跡

坊津一乘院の末寺となりました。

明治初期の廢仏毀釈に至る約450年の間、六十数代の住職がおり、枚聞神社までを司り、神領（枚聞神社の所領）二百六石の内、百七十九石を授けられ、大きな権力を持つていたようです。

また、瑞應院には島津元久・家久の位牌が安置されており、頼姫の菩提寺でもあつたとされています。

本尊は、魔仏毀釈の難を避けるため、埋め隠されました。が、明治12年に掘り出され、現在は南さつま市（旧坊津町）久志の広泉寺に安置されています。

また、昭和62年には西側駐車場で、江戸時代の石棺が発見され、棺内には93枚の古錢が入れられていました。

## いりのはらせきとうくん 入野原石塔群



入野原石塔群



住所：指宿市間間十町4754-1-6



天の岩屋供養塔群



## あま いわやくようとうくん 天の岩屋供養塔群

入野原石塔群は、石塔の造りや形などから室町時代くらいのものではないかと推定されています。

開聞宮由緒古跡古方帳には、瑞應院から2キロメートルほど西の入野原に小四郎の塚があると記されています。

小四郎は、頼姓家の相続争いで、兄九郎と瑞應院の住職を殺し、第七代の頼姓城主・頼姓久虎となつた人物です。

ただ、現在残っている石塔群が、小四郎や頼姓氏に関係するものかどうかは分かつていません。

この石塔は、現在地の西南約100メートルのところにあります。が、昭和60年度の区画整理事業の際に現在地へ移設しました。

ここには、現在複数の板碑と五輪塔の壊れたかけらが建っています。室町時代のものと江戸時代のものがあり、いずれも當時の人々が死後のみい福を祈つて生前に建てたものです。

この岩屋には、次のような伝説が残っています。

「ある僧侶（塩土翁とも）が、岩屋で法水（修行のために身体を洗い清めるための水）をくんで37日間の修行をしているところに一頭の雄鹿が現れ、法水をなめました。すると、雄鹿はたちまち身ごもり、気品の高い女の子が生まれました。

瑞應院と名付けられた女の子は、知通和尚に育てられ、後に

開聞岳の麓、登山道の脇に「岩屋どん」と呼ばれる場所があります。

ここには、現在複数の板碑と五輪塔の壊れたかけらが建っています。室町時代のものと江戸時代のものがあり、いずれも当

天智天皇の后になり、大宮姫と呼ばれたそうです。



市指定有形文化財

## 松原田観音寺跡石塔群

まつばらだかんのんじあことせきとうぐん

開聞古事記によると、

昔、松原田一帯に觀音寺が  
建てられていたそうです。

しかし、廃寺になつたり、  
明治の廢仏毀釈で破壊され

たりした結果、六地蔵塔や  
五輪地蔵塔、板碑等は、永

い年月にわたつて地中に埋  
もれて散逸したままとなつ  
ていました。



住所：指宿市開聞十町 2580

その後、昭和2年に公民館敷地を整地するとき、埋もれていたこれらの供養塔を掘り出し、保存しました。

そして、昭和59年に行われた公民館改築の際、現在地に移設し、種類ごとにまとめ安置し直しました。なかでも、大永2（1552）年8月と記されている六地蔵塔は、この地方で最も古いものです。

市指定有形文化財

## 瑞應院中興開山舜請の墓

すいおういんちゅうこうかいざんしゅんぜいはか

舜請法印（法印=僧の最上位の役職名）は、小納言阿闍梨と号し（本名のほかに別の名前を名乗ること）、正中3（1326）年に瑞

應院を開院しました。

舜請は、応永27（1440）年11月27日、13歳で亡く

なつたといわれています。舜請の墓は枚聞神社の東に建てられており、3基の宝篋印塔の中央にあります。左右の2基は南向きに建てられていますが、舜請の墓だけは神社の方（西向き）を向いています。墓が神社の方を向いているのは、舜請が御神体の御化粧の不都



住所：指宿市開聞十町 1188

合で神罰を受け、目玉が飛び出したことに對して深くざんげし、生きたまま墓の中に入り、7日7夜、輪を轟らし、神社の方を伏して拝み死んでいったためと伝えられています。

## 市指定有形文化財 上野神社周辺供養塔群

聞聞古事記によると、上野集落は、（すめいていのこ）天皇の子孫にあたる上野少将左衛門大夫藤原豊若麿によって莊園化されたとあります。

上野氏系図によると、桓武天皇の子孫である平良文の孫がこの地に來たと記されています。また、他家白城主由来記にも上野氏の名前が見られ、頼姓氏の一族として、この地域を治めたといわれています。

伝承と供養塔群との關係

には不明な点もありますが、昔から地域の人々は上野城主の墓として供養塔群の保存に努めてきました。昭和15年には、整地して神社を新築しています。

かつて、この地に暮らした人々の佛教信仰の深さをしのばせる大切な文化財です。



瑞應院中興開山獎請の墓



住所：指宿市開聞十町1359-3



上野神社周辺供養塔群



住所：指宿市開聞上野1963

ます。

上野神社周辺には、こうした伝承との関連を思われる「上野どんの墓」と呼ばれる百数十の供養塔群があります。

比翼塚（愛し合つて死んだ男女と一緒に葬つた塚）とみられる2基の宝塔を中心、周囲には五輪塔や板碑等、中世のものと思われる供養塔が多くあります。

市指定有形文化財

## 上仙田東屋敷供養塔群

市指定有形文化財

## モクヨ山六地蔵塔



上仙田東屋敷供養塔群



住所：指宿市間間仙田 1791-3



モクヨ山六地蔵塔



住所：指宿市間間仙田 1444

仙田瓦ヶ尾一帯は、昔、仙田村東屋敷と呼ばれ、この地に住んでいた六兵衛（戒名は月秋淨井上座）が建立したといわれる六地蔵塔一基、五輪塔15基、板碑6基のほか、多くの供養塔の残欠が残っています。元和8（1622）年に建立された六地蔵塔には、六兵衛が、この世の幸福と極楽に往生することを願って、伊勢神宮や熊野権現に参拝したことや33力所を巡礼したことなどが刻まれています。

唐船峠東入口の近くには、ムクロジの大木の林があり、古くから「モクヨ山」と呼ばれています。モクヨ山には、天正10（1582）年に建てられた高さ2mの六地蔵塔を中心に、数基の五輪塔と板碑1基があります。六地蔵塔は笠の部分が破損していましたが、昭和56年に修復されました。六地蔵塔には、頬張城にいた平姓池田対馬守（平氏）平氏の流れをくむ）が、天正8（1580）年に急死した次男・新三郎の成仏を願つて供養したという碑文が刻まれています。

市指定有形文化財

## 興玉神社（九玉大明神）の棟札

市指定有形文化財

## 九郎塚と頼宗塚

仙田九玉原の興玉神社には、5枚の棟札が残っています。

棟札とは、棟上げのときに工事の由緒、年月日、建築者、工匠（飾りや工作を作る職人）などを記して棟木に打ちつける札のことです。最も古いのは、天文5（1536）年12月20日と記された神札で、頼姓第4代兼洪の時代のものです。

頼姓氏の延命（長生き）、子孫繁昌、武運長久（戦に勝つ運命が長く続くこと）、郡内安全の祈願などが記されています。兼洪の家来の竹内実通が、大工の田中左近太夫、鍛冶職人の上野景鶴に命じて九玉大明神の再建造を行ったときのものです。このほか、正徳元（1789）年、文化5（1808）年の棟札が残っています。



興玉神社（九玉大明神）の棟札



住所：指宿市十二町2290  
(指宿市考古博物館内で保管)



上段：九郎塚 下段：頼宗塚



開聞小学校の敷地にあり、地元の人々に九郎塚（クロドン）、頼宗塚（テスドン）と呼ばれている2つの塚には、次のような話が伝えられています。

頼姓6代城主兼堅の子・九郎には、兼堅の側室の子である小四郎という弟がいました。兼堅の死後、この異母兄弟の間で、頼姓家の相続争いが起きました。小四郎の母親は、わが子に頼姓家を維がせようと、兄の九郎をひどくいじめました。事情を伝え聞いた

島津貴久は、九郎に深く同情し、自分の近くに住ませました。

ところが元亀2（1571）年貴久が亡くなり、九郎は後ろ盾を失つてしましました。

頼家の実権を握っていた小四郎の母親は、小四郎を城主にしようと謀りました。九郎を支持する農民たちは、九郎に頼姓城へ帰つてくるよう嘆願しました。九郎は一時頼姓城に戻りましたが、城の中に温かく迎える人はいなかつたのです。意を決した九郎は、元亀2（1571）年7月13日、63人の家来とともに牧間神社に立てこもりました。

7月17日、九郎を支持する農民たちは城に攻め込みました。しかし、戦闘に不慣れな農民たちは戻り討ちに合い、九郎らもたちまち兵に取り囲まれてしまいました。

瑞応院14代住職であった頼宗は、九郎をかくまい、坊津の一乗院に逃がそうとしました

が、兵士に見つかり、九郎とともに殺されてしましました。

一人の悲しい死を悼んだ村人は、九郎と頼宗が亡くなつた場所にそれぞれ塚を建て、一人を供養したそうです。

#### 市指定史跡・有形文化財

## 鳥越堀切と決湖碑

現在、池田湖には6つの河川がつながっています。その中の一つ、池田湖南側の「新川」のみが流出河川で、宮田川と合流して川尻漁港へと続いています。この川は、江戸時代から明治時代にかけて行われた大工事によって造られたものです。

島津齊彬は二月田温泉に滞在中、指宿は水利に乏しく田んぼがないことから、池田湖の水を灌漑に利用することを考案しました。早速、郡奉行に命じましたが、郡奉行は水神の祟りがあるとして、



住所：指宿市間間十町2772（九郎塚）  
指宿市間間十町2519-4（頼宗塚）



決湖碑

断してしまいます。

その後、明治5（1872）年に県令大山綱良がこの事業を再開させます。工事には串木野鉱山の労働者たちも動員されました。莫大な工事費と延べ11万人余りの作業員を賃やす難工事でしたが、明治9（1876）年、ついに「鳥越堀切」は完成します。この工事によって池田湖は初めて海へ流れ出る河川となることとなり、開聞仙田に新田が造成されたことを記念して、同年には「決湖碑」が建てられました。

この碑文には難工事であつたことや池田湖の湖面が下がつたこと、新たな耕作地として水田や桑田を開墾したこと、当時の役人の名前などが刻まれています。

調所笑<sup>トコロヒカル</sup>左衛門廣郷が財政再建に取り組んだ天保年間、指宿では大型公共事業が相次いで行われました。

#### 「鳥越堀切」と「決湖碑」は、

江戸時代から明治時代初期にかけての「近代化遺産」の一  
つとして価値が見いだされ、平成25年3月、市の指定文化財に指定されました。当時の優れた技術と先人たちの苦労と努力の跡がしのばれる文

80町歩の干拓を目指して始まつた一大事業も明治維新によつて中  
年に始まります。

しかし翌年、音彬は逝去してしまい、さらに今和泉島津家の領地  
80町歩の干拓を目指して始まつた一大事業も明治維新によつて中  
年に始まります。



掘削中の鳥越堀切

しかし翌年、音彬は逝去してしまい、さらに今和泉島津家の領地  
80町歩の干拓を目指して始まつた一大事業も明治維新によつて中  
年に始まります。

しかし翌年、音彬は逝去してしまい、さらに今和泉島津家の領地  
80町歩の干拓を目指して始まつた一大事業も明治維新によつて中  
年に始まります。



住所：指宿市開聞仙田 1685-6  
1705-10

市指定有形文化財

## 枚聞神社 琉球扁額7点

今から400年前、鹿児島藩は幕府の許可を得て、琉球王国を統治していました。そして、統治の証として、毎年、琉球から使節団が鹿児島を訪れます。

枚聞神社の宝物殿には、江戸時代に琉球使節から奉納された扁額が7枚飾られています。扁額とは、門戸や室内などに掲げる横に長い額のことです。

琉球扁額は、県内に十数枚残っていますが、最も数多く残っているのが枚聞神社です。それは枚聞神社が、琉球からの使節が鹿児島を訪れる際、航海の目印にした開聞岳を祭る神社であつたからといわれています。



枚聞神社の琉球扁額



住所：宿市間聞十町1366



酒甕は枚聞神社宝物殿内に展示されています。



住所：宿市間聞十町1366

## 枚聞神社の酒甕

枚聞神社宝物殿に、大きな甕があります。これは、現在の愛知県一帯で生産された「常滑焼」の甕であり、約650年前に作られたものであると考えられます。神社の伝承によると、豊玉姫が玉ノ井で水をくんだ甕を、酒作りの甕として代々使っていましたが、正治元（1199）年11月3日の台風によって、社殿が壊れ、豊玉姫の甕も割れてしまったと言われています。このため、神社の神官が京都に上京して作らせた甕が、現在残るものとされています。

江戸時代に編集された『三國名勝圖会』にも挿入入りで紹介され、神社のお神酒を作る酒甕として使われたことが分かっています。

## 鏡池



『薩藩勝景百図』に描かれた鏡池と開聞岳

江戸時代末期に編纂された「三國名勝圖会」に、市を代表する名勝の一つである鏡池のことが書かれています。それによると、「周囲は5町余り（約545m）、深さは九尋余り（約16m）、池の中には大小の樹木の枯株が多くあり、嘉吉3年（1443）年に池になつたと言われている。形状は、大きな円鏡のようで、開聞岳の影を漫す」と記されています。

また、「薩藩勝景百図」では、3人の男性が鏡池の縁にある松の木のそばで、雄大な開聞岳と静かな湖面の鏡池を眺めながら一休みしている様子が描かれています。

このことから、鏡池は古くから名勝として親しまれていたことが窺えます。

江戸時代末期に編纂された「三國名勝圖会」に、市を代表する名勝の一つである鏡池のことが書かれています。それによると、「周囲は5町余り（約545m）、深さは九尋余り（約16m）、池の中には大小の樹木の枯株が多くあり、嘉吉3年（1443）年に池になつたと言われている。形状は、大きな円鏡のようで、開聞岳の影を漫す」と記されています。

## 島津重豪奉納の「始生」額



「始生」額



住所：宿市開聞十町1366

枚聞神社には、第八代鹿児島藩主島津重豪が奉納した「始生」と書かれた扁額があります。重豪といえば、藩校である「造士館」や、農業に必要な曆を作るために天文観測所「明時館」を設立した藩主として知られています。南九州最大の繁華街である天文館の地名は、この「明時館」に由来しています。

額に書かれた「始生」は、七十二候（気象や動植物の様子を例にあげて自然の移り変わりを示した歴）の中に、「葭始生」という

形で登場しています。

文字通り、草(霞)が生え始める時期、現在の4月下旬ごろを表した言葉です。「よし」は、「善(よ)し」にも通じるため、おめでたい意味合いもあって「始生」の文字が書かれたのかもしれません。「始生」額は、島津重豪の枚聞神社に対する崇敬の深さを物語る名品の一つです。



日露戦争出征兵士凱旋門

## 日露戦争出征兵士凱旋門

にちろせんそうしうつせいへいしがいせんもん

枚聞神社の鳥居のそばには、三角柱の拿石が載せられた高さ3mの本柱と、高さ1・3・2メートルの脇柱で一組になつている石製の門柱があります。

この門柱は、日露戦争に出征し、輝かしい武勲れらの中に、東京国立博物館に貸し出されている一枚の鏡があります。

一枚は、「草花蝶孔雀鏡」です。青銅製で、中央に紐を通す穴を設けた正方形の鏡です。平安時代の終わりごろ（12世紀）に作られたものです。明治37（1904）年8月、

旧領姓村が、立口の石切り場で切り出したものを用いて建立しました。

建立当時、凱旋門は西側の県道上にありました。昭和40年代の道路拡幅工事の際に撤去され、長らく放置されていました。

しかし、日露戦争終結80周年を迎えるにあたり、この由緒ある重要な文化財を後世に残そうと、有志たちが立ち上がりました。そして、昭和60年10月、賛同者からの浄財を得て、現在の場所に原形どおり復原されたのです。



住所：宿市問間十町1366

## オリビンがあふれる砂浜

開聞岳の東にある

川尻海岸には、約1kmにわたってオリビンと呼ばれる透明な

黄緑色の鉱物を含んだ砂浜が広がっています。この鉱物の宝

石名は「ベリドット」といい、8月の誕生石にもなっています。

オリビンは、約3700年前の開聞岳誕生に伴う噴火によって、地上へ噴出されました。そして長い年月をかけて風化していく、やがて砂浜に堆積するようになります。

鏡の文様は、中央から伸びた草花の刷りを蝶が飛び、その下に孔雀が立っています。もう一枚は「群蝶双雀鏡」です。青銅製の円鏡で、南北朝時代（14世紀）に作られています。中央には、蝶の群れと2羽の雀の文様があります。



草花蝶孔雀方鏡



群蝶双雀鏡



住所：宿市開聞十町1366



開聞岳とオリビン

川尻海岸の浜砂に含まれるオリビンは、直徑が0・5mm程度のものから、2mmに達するものまであります。オリビンがこの砂浜に多く残されているのは、普通の砂粒が簡単に波にさらわれるのに対し、オリビンは比重が大きいため、簡単にはさらわれず、多く残るから

## 下仙田寺鼻の石造物群

隣接地に移設されました。

開聞下仙田地区には、かつて旧峰山寿福寺がありました。旧峰山

寿福寺は、旧頬姓町にあつた島津久豊が開基した禅寺の證音寺の末寺で、下仙田地区に多くの関連施設があつたといわれています。明治4(1871)年の廃仏棄釈により、他の寺院と同じく破壊され

ることになり

ました。

下仙田地区

の一角落には、

廃仏棄釈によ

り壊された旧

峰山寿福寺関

連の石造物が

集められ、地

区の人々に

よつて守り伝

えられてきま

した。この石

造物群は平成

19年12月、

建設に伴い、



下仙田寺鼻の石造物群

移設先には、石塔籠1基、

「奉造立」銘塔1基、板碑1

基、大日如来石像1体、塔婆

を彫った板状供養塔1基、

家形石塔1基、無縫塔3基、

五輪塔2基、墓3基、「大日

如来」と彫られた石塔1基と

その脇に自然石が1基設置さ

れました。

また、板碑の背後には、「大

と彫られた大日如来石塔1基、自然石を用いた石塔3基が並べてあ

ります。さらに、これらの中の石造物の後ろには、五輪塔の空風輪や火

輪等が並べられています。

## トカラ馬

うま

開聞山麓自然公園には、トカラ馬という日本在来馬がいます。背中までの高さが120cm程度で、栗色をしたボニーのような小型馬です。たてがみや尾の毛が長く、濃い色をしていて、とてもおとなしく人懐こい馬です。かこしま文化財辞典によると、トカラ馬の歴史は明治30年ごろ、喜界島からトカラ列島の宝島へ十数頭が移入されたことに始まる記されています。

戦前には100頭前後が飼育されていたようですが、その後減り



住所: 指宿市開聞仙田2576-2



トカラ馬

続け、昭和27年には43頭になってしまいました。この年、専門家によつて「トカラ馬」と名付けられ、純粹な在来馬として貴重な種類であることが確認され、翌年には県の天然記念物に指定されました。

しかしその後、島だけでの飼育保存が困難になつてきましたため、各

地へ移して、  
飼育保存す

ることにな

りました。

自然環境

が似ている

開聞山麓に

引っ越して

きたのは、

昭和38年

ごろです。

### 花瀬

開聞獄の西脇駄浦の磯辺にあり。地頭仮屋より千方凡を里

拾式町余

磯岩多く、町間量かたし、潮汐漲り流れ、岩間に潮満まりて池の

如し

底を眺めば、磯かきの類五色の色をなす、或は時に出、或は

時に没す

四季共にあり、その形円形にして大小あり。大なるは圓五六六寸、

小なるは三一四寸菊花に似たり、名づけて花瀬といふ

磯石間に磯の種類多し、その中に形ち小にして舌あるものあり、

土俗（地元の人）これを「勢い」といふ

壁の字を用ゆるか、そのせいの類潮底にして、舌を吐て五色の色

をなす。故にこれを見るに出没隠見定まらず、名づけて「花勢」と

いふ

その薄岩急潮の間にあるをもて俗に花瀬と呼ぶといふ

獄の東、川尻浦にもまた花瀬あり、駄浦には劣れり

### 花瀬

これは、江戸時代の後半に鹿児島藩が出版した「薩摩名勝志」という地誌からの抜粋です。花瀬の海には、菊の花のような色とりどりの直径9~18cmの生き物がいて、それが出たり引つ込んだりすることが書かれています。

また、この生き物を見ようとしても、あつという間に隠れてしま

い、なかなか見ることができないことがから地元では「勢い」と呼ばれており、「花勢」の名が付いたといわれています。

火山学者の成尾英仁氏は、「花瀬」の地名は、五色からなる不思議な生き物に由来し、「花勢」が「花瀬」に変化したと述べています。この不思議な生き物について、博物学者の荒俣宏氏は、「イバラカンザン」と呼ばれる生物だらうと推定しています。

イバラカンザンは、温かい海に生息するゴカイの仲間で、赤や青、

黄や緑など美しい色彩を帯びた鰐冠<sup>（じゆかん）</sup>というエラを持つています。

鰐冠は刺激を受けると素早く引っ込んでしまうため、前述の「勢い」という名前の由来になつたと考えられます。



イバラカンザン（山村秀雄氏提供）



住所：指宿市間聞十町4208-11



「塩釜どん」の掛け軸

## 「塩釜どん」の掛け軸

川尻漁港の入口には自然石が3個並べられており、「塩釜どん」と呼ばれ、塩釜神社のご神体として祀られています。その由来につ

いては、その昔、この地に塩土老翁<sup>（しおどりろうおう）</sup>という神様が塩釜をつくり、二反歩（約2千里）ほど日本の日本最古の塩田を開いたと言われています。

また、川尻には「塩釜どん」を描いたとされる掛け軸が古くから伝わっています。上部には開聞岳が高くそびえ立っており、その麓に枚聞神社の屋根の一部が配置されています。前面には、3人の神様が並んでおり、中央は天智天皇、向かって左側は大宮姫、右側の不動尊<sup>（ふどうそん）</sup>の姿をしているのが塩土老翁と伝えられています。かつては正月一日に床の間に掲げ、塩神様の祭典を行っていたそうです。掛け

船がいつ頃の作かは不明ですが、塩釜神社の山諸を表すために作られたのではないかと推測されます。

また、江戸時代から明治時代の初めまでは、枚聞神社のお祭りの際、川尻の塩屋（現在の川尻上・北集落）と臨浦の塩屋、開聞岳を挟んだ東西の塩屋が、交替で塩を貢納しており、この地が塩作りにとって重要な土地であったことが窺えます。

## 海神

## 開聞岳

かいじん

かいもんだけ

開聞岳は、今から約3700年前の縄文時代後期に、阿多カルテラの西端に位置する海底噴火を皮切りに火山活動が始まり、その後、少なくとも12回の噴火を繰り返し溶岩や火山レキ、火山灰が積み重なって陸続きとなり、海に突き出たような現在の姿になりました。開聞岳（神）にまつわる最古の記録は、「日本三代実録」の巻觀2年（860）の神位の昇叙の記録です。また、貞觀8年（866）と元慶6年（882）に、神位が昇叙し、正4位下になりました。その理由について永山修一氏は、「開聞神が『崇』を成す性格、即ち噴火をおこすものであつたため」としています。



空中から見た開聞岳

山川港に入港する南島や琉球、中国との交易船の乗組員は、大海の遠路の中、航海安全を祈願する開聞岳を航海の目標物にしながら航海し、遙かかなたに開聞岳が見えた時には、さぞかし胸をなでおろしたことでしょう。

「三國名勝図会」には、航海中に開聞岳が見えると、船中で酒を酌み開聞神を祀ったと書かれています。また、山川港に入港した琉球使節団は、開聞神と「海の神々」を祀る枚聞神社へ航海のお札を目的に参詣し、琉球国王の一族が琉球扁額を納めています。

また、慶長9年（1609）、島津義弘は、琉球出兵の折に80余艘の船を山川港に集結させました。出兵前に枚聞神社で祈願しました。

出兵前に枚聞神社で祈願しました。そして、翌年に枚聞神社の本殿等の改修を行っています。

このように、平安時代に噴火をおこし崇（そよ）を成すものとされた開聞岳（神）は、中世、近世には、航海安全の祈願対象となり、「海神」として崇拝されていました。これは、江戸時代に、開聞岳を「海門岳」と表記したことからもうかがい知れます。

---

---

**指宿文化遺産図鑑**  
(史跡・有形文化財・天然記念物編)

令和3（2021）年3月

発行  
指宿まるごと博物館実行委員会  
鹿児島県指宿市十二町2290番地  
TEL. 0993-23-5100

自創刊  
株式会社  
鹿児島市南栄3丁目1-6  
TEL. 099-268-1002

---